

■若い女性の生きがい
6すばらしい青春の生きがい

© 1968 Printed in Japan

昭和四十三年十二月五日第一刷

編集者

井上 靖・田中澄江
扇谷 正造・荒 正人

発行者

遠 藤 左 介

発行所

株式会社主婦と生活社
東京都中央区京橋三ノ五
電話東京(五七)〇三二一
振替東京三六三六四

印刷所

共同印刷株式会社

製 本

昇 栄 社

定価 四二〇円

万一、落し乱丁の場合はお取り替えます。

すばらしい青春の生きかた

扇谷 正造 編

目次

青春は素晴らしい。なぜ？

私の出発点

歌にみつけた青春

青春を舞台に捧げて

女流画家の荊棘いばらの路

私にいわせれば青春は……

なつかしのパリ

扇谷 正造

内地内地 文子文子

加藤登紀子

杉村 春子

三岸みぎし 節子せつし

菅原 暁子

石井 好子

5

23

45

65

91

114

147

わたしの自伝	平林たい子	175
気ままな青春	越路 吹雪	213
デザインの世界に入るまで	桑沢 洋子	242
オリンピックをめぐって	小野 清子	265
パリの青春	朝吹登水子	294
あの頃の私、そしてサガン、 ボーヴォワール		
「学歴なし」の履歴書	佐多 稲子	319

口絵 大雪山と陽光（北海道）
撮影 早川 清

装 幀

イラスト

アド・エンジニアーズ・オブ・トーキョー
人見悠美子

寺門保夫

青春は素晴らしい。なぜ？

扇おうぎ谷や正造しやうぞう

神は万人にひとしく一日二十四時間という時間を与え給うた。きのうの二十四時間はとり返すすべもない。あすの二十四時間はまだ手にする事はできない。今、手にあるきょうの二十四時間を充実に生きてまえ。人生はつまるところ、この決算報告書に外ならない。

1

私の愛読書の一つに、菊池寛氏の『半自叙傳』というのがある。菊池寛といっても、今の若いひとたちには、なじみがうすいかもしれない。しかし、芥川龍之介の親友であり、かつ「文藝春秋」の創始者といえ、わかりがいいかもしれない。いや、高校時代に演劇部におった人なら名作『父帰る』の作者だといえ、思いあたる人もあろう。

菊池氏は、大正から昭和の初期にかけて、「文壇の大御所」といわれた。大御所というのは、

徳川幕府を創設した家康の尊称である。文壇における氏の立場は、それに匹敵した。早い話が税金である。そのころの流行作家に吉川英治、三上於菟吉、吉屋信子などという人があげられるが、菊池氏の税金は、まったく圧倒的で、二、三位の吉川、三上氏らの二倍以上を払っていた。いわゆる流行作家で、新聞小説ではひっぱりだこ、その小説が終るとすぐ映画化あるいは芝居になって上演される。一方、大映と文藝春秋社の社長でもある。つまり氏は世俗的な意味でも大成功者であった。

氏の作品が、今日、どのような評価をうけているか、くわしい事は、はぶく。すくなくとも初期の短篇、中篇は、今日においても近代文学史を飾る珠玉の作品であることは疑いがない。しかも、それらにまじって、文芸評論家によっては氏の『半自叙傳』が一番だという人もいる。それは、何よりもこのエッセイが、明治の中期から大正にかけての一人の知識人の青春物語となっているからである。

この作品が、「文藝春秋」に連載されたのは、私の中学から高校時分じゃなかったかと思う。一回分が枚数にしてわずか四、五枚のものだったが、そこには、われわれより二時代前の青春が、簡明かつ率直に描かれている。しかも、興味をそそるのは、それが、ひどくデタラメで、野放図もない青春だという事である。

たとえば、氏は一高(旧制)に入るまで、三回も学校が変わった。生家は高松のあまり豊かでない家庭である。そこで官費の高等師範(今の教育大)に入ったのだが、授業中にサボってテニスをしているのがみつきり除名された。つづいて明大に入ったが、ここもとび出し、学資を出してくれる老人があつて、その人と養子縁組した。そこもオン、出で、今度は早大に入るのだが、結局は早大も中途退学した。

最後に、どうせ、まわり道したのだから、いっそのこと、はじめっからやり直そう、と一高を受験してパスした。その時、氏は二十二歳であつた。旧制高校は、順調にゆけば十八歳入学が普通だったから、氏は四年ばかり道草を食ったわけである。しかも、こうして入った一高も、またまた友人の窃盗の罪をかぶつて、ついにこれも卒業していない。検定試験をうけて高校卒の資格をとり、京都大学へ行き、やっとこさここを卒業した。

友人の久米正雄氏(作家)が、京大を卒業して上京して来た氏を見て、

「よく、君は卒業できたなあ」

と感嘆する。それを聞きつつ、氏自身も、(ほんとうに、われながら)と思つた、と、あとで何かに書いている。

——私は、高等師範を青年客気の情熱の赴くままに、行動して出されたが一高もやはりそ

うであつた。しかも、なけなしの学資、借金をして送ってくれる毎月の学資を使いながら、私は真面目な学問一方の学生にはなれないのだった。こういう事を考えると、私は今でこそ理論的であるとか利口者だとかいわれているが、私のどこかに情熱的な出鱈目なところがあるのかも知れない。『半自叙傳』——昭和三年十二月）

一高時代の菊池氏の生活は、しかし、楽しかったもののようである。もちろん明治の終りごろのパンカラな時代のことである。デカンショをうたい、ストームする、そういう寮生活だった。みんなお金に困った。といって、その金は、おでんを食べたり、牛肉を食べたり、あるいは芝居の立見をするための小遣いである。ある日、級友の一人が便所にドイツ語の辞書をおとした。拾いあげたものには、それをやるという。これを聞いた菊池氏は、長い竹の棒で辞典を拾いあげ、水で洗って古本屋に売りとばし、仲間たちと痛飲馬食したと書いています。そうかと思うと、あの年ごろの青年特有のユーモアとウィツティな小話もこの中にはいくつか書かれている。

ドイツ語の教授に福田先生という人がいた。この人は、森鷗外の短篇『二人の友』のモデルといわれた人だ。先生は、教室でよく駄じゃれをとばした。訳読に級友の久米正雄氏があてられた。スラスラと訳がでてゆかない。すると、先生は、

「これは、どういう意味か、君にはクメとれないんですか」

と聞いた。久米とクメとをひっかけたわけである。すると久米氏は

「ええ、どういう意味がフクマっているか」

と答える。教室内に、ドット爆笑が湧く。教室内のこういう爆笑は、カラツとして力強く、青春特有のものである。

クラス中の秀才を自任している芥川龍之介と、あとで第一次共産党の幹部となった佐野文夫という二人の秀才の横顔もクッキリ描き出されている。旧制高校では、「原書で読む」というのは、級友同士の間では、いわば見栄であった。二人は教室の窓によりかかりながら話し合っている。

芥川「原書を読んできると、つい、僕は、ウトウトねむくなる」

佐野「そんなら、眼がさめてから、また読めばいいじゃないか」

こういう、何気ない会話を菊池氏は、小耳にはさみ、フンと思う。このあたり、あの年ごろの青年のてらい気をサラリと描いて絶妙である。

しかし、私が、いつも、いちばん、心をうたれるのは、一高時代、菊池氏が、気の合った友だちと、旅行するくだりである。それは、ある意味で、素晴らしい青春を簡潔に描いている

ともいえる。

——一年の冬休みに、寮に残った中で、佐野と私の他の二人の寮友とで旅行した。それは利根川の布佐まで歩いてそこで一泊し、それから手賀沼を見て下総しもふさの森林地帯を通って、江戸川の下流の猫実ねじねというところへ出て、その汚い飲食店に宿とどった。しかし、それは私たちにとって楽しい旅行だった。そこで喰った赤貝は忘れられないほど美味だった。

その旅行が面白かったので、その春にまた同じ顔触れで三浦半島を旅行した。浦賀湾の水の青さや、葦アシが咲いている春の道を行くと、半島がだんだん狭くなり、左に東京湾が見え右に相模湾が見えるあたりは、実にいいところだと思った。

三崎を朝早く立ち、鎌倉へついたのは、月が出ている頃だった。埠頭に腰かけて、歴史好きな私は茫漠たる八百年の昔を回想し、感慨無量だった。『半自叙傳』——昭和三年十月

2

話をすこし現代に移そう。

私は、昨年（一九六七年）の夏、訪独青少年代表団顧問ということでドイツ国内を一カ月、それからあと一人で、パリ、ロンドン、コペンハーゲン、ストックホルム、プラハ等の街々

を見聞して来た。

いたるところで、日本の若い人たちに会い、驚いた。しかも、それが、かなり無鉄砲なのに二度驚いた。

あれは、たしか八月の中旬だったと思う。私たち訪独青少年代表団C班の一行が、北ドイツのハノーバー市についてまもない夜である。市のあっせんで宿舎はその「自然の歓びの家」というところにきめられていた。

一行は、その日のスケジュールをすませ、夕食も食べ、さてミーティングに入ろうとしていた。たぶん夜の九時ごろでもあったろうか。

何やら表で、人騒がしい物音がする。見ると二人の若い娘さんが、荷物を抱えて通りに立っている。泊めてくれというのである。なんでも南、中ドイツを泊り歩いて、ここがユース・ホステルだと聞いて来たというのである。

宿舎の管理人に聞くと「ノウ！」という。市発行の許可証がないと泊められないという。途方にくれているらしい二人に同情し、私は、いったい、このハノーバー市のユース・ホステルは、どこにあるのか、今からいっても泊まれるものか、タクシーはどうしたものか、と各方面にいろいろ交渉したりしているうち小半時たった。

それから表へ出て二人にいった。

「どうも、ここはダメらしいよ」

すると、一人が、

「時間無駄にしたわね、あの時、すぐ行けばよかった」

とつぶやいた。私は、いささか、ムツとした。無神経にもほどがあると思った。そこは年の功、やっと胸をなでおろしながら、

「すぐ行けばよかった、といって、君たち、ユース・ホステルはどこにあるか知ってるのか。それにここは道路から大部分入りこんでいる。荷物を持って、そこまで歩いて行くのか。いったい、タクシーをどうして探す？ 第一、君たちドイツ語がしゃべれるのか？」

「いいえ、でも、こうして、私たち、今までドイツを旅行して来たんです」

私は、思わず、ウウンとうなってしまう。二人とも、どこかのBGさんで、夏休みを利用しての旅行なのだが、なるほど、こういう先生たちが大使館という、さまよえる日本人、なのだな、と思い当った。

この夏は、こういう無計画無鉄砲な日本の若い男女が約五百人ばかり、ヨーロッパ各地を漂泊していたそうだ。なかには、旅費をすっかり使いはたし、南独やスイスあたりでコップ

パンと水をすすりながら「行軍」を続け、行き倒れ同様になって大使館や領事館の厄介になった連中もかなりいたようだ。

パリでは「男に監禁かんきんされて、ホテルから一步も外へでられない」と日本の母親の許へ手紙を出した娘さんがいた。

母親の訴えで、国際警察も動員され、あわててパリの日本大使館員が、そこへ行ってみたら、二十四歳の女性で、本人はノホホンとして、

「お金がなくなっただけで、ちよっと、オーバーに手紙出したの」

とケロリとしていたのには、まったく言葉もでなかったといっていた。

こういう放浪日本人の中でも、今、ヨーロッパで評判になっているのは「コペン吹きだまり」という連中である。

その数は三百人から五百人といわれている。なるほど、いるいる。街を歩いていると髪をバサバサにし、よごれたワイシャツにしわくちゃのズボン、それにサンダルか何かをつっかけて街を歩いている。黒い髪は伸ばすと、ひどく不潔に見える。ヨーロッパの街々はきれいだ。その中にまじると、彼等は、何か、乞食みたいにみえる。

「まさに、国辱ものですね」

と、現地の商社マンたちは言っていたが、そこまでいいきるのは、すこしコクだ。

これらの吹きだまり組は、いったい、どういうコースを通るのか。九万円都合して、ナホトカまで船で行く。そこからシベリヤ鉄道でモスクワに行きつくところには、ちょうど旅費がつきはてる。そこで、ひところはストックホルムへ行ったが、スエーデンがうるさくなつたので、このごろはコペンハーゲンへ向う。

デンマークは社会保障の国だ。労働賃金は高い。労働者も労働の質を選ぶ。そこで、人手不足をかこつ皿洗いや掃除夫をやり、食いつなぐ。そのうち、旅費をためて帰国するものもあるが、中には、なんとなく、ヨーロッパに住みつき、落ち行く先は、国際的ルンペンになりはてる——のものもあるという。この連中の中には、金に困り、麻薬の密輸を手伝い、新聞に大々的にのせられたものもあった。しかもそれがレッキとした大学の学生だ。

もっとも、全部が全部、そういう連中ばかりだというのではない。中には、ひどく感心な青年もいる。チョキンチョキン二人組などは、まさにそうだ。この二人組というのは、若い理髪屋さんである。スペインのパロセルナで、理髪コンクールが開かれた。そこへ二人は、行く先々で、他人様の頭を刈っては金を稼ぎ、稼いでは動き、動いてはまたチョキン、チョキン、の行脚をつづけ、ついにその目的を達したというのである。

感心なのは、そのことだけではない。彼等は、頭を刈っては、借りたその場所をいつもキチンと掃除して行つた。「たつ鳥は後をにこさず」を文字通り、地で行つたわけで、これは、国際的に日本の評判を高めたといわれている。

コペンの日本大使館のF参事官にあつた時、私はこの話にふれて、

「たいへんでしような、こういう連中を、大勢かかえて」

と水を向けたら、

「まア、そりや、そうです。しかし、よく考えてみると、私は驚くのですよ。彼等のモビリティ(行動力)といえますか、そのエネルギーにですね。ま、青春の力というものですかね。

日本の若い人たちの、行動半径もずいぶん広くなったもんです」

私はF参事官の言葉に大いに考えさせられた。

3

前置きが、すこし長くなった。青春は素晴らしいという。なぜか？

第一に、私は無鉄砲ということではあるまいか、と思う。あるいは無鉄砲の特権といったほうが、より正しいかもしれない。大人は、前後左右を見回し、利害得失を考えて行動する。